

## ロベルト・ガルフィアス教授について

徳丸吉彦

ロベルト・ガルフィアス教授は 1932 年にメキシコ系アメリカ人としてサンフランシスコでお生まれになりました。サンフランシスコの大学で人類学と作曲を学び、大学院はカリフォルニア大学ロサンゼルス校で学ばれました。これはアメリカにおける民族音楽学の興隆期に当たります。修士論文から日本の雅楽の研究を行い、修士論文として「唐楽の基本旋律」を 1958 年に提出しましたが、これはアメリカの民族音楽学会が設立された翌年に当たります。博士論文では「雅楽における唐楽作品」を 1964 年に提出しました。これは、1976 年に出版された『千秋楽、日本の宮廷音楽の唐楽様式：その理論と実践』(Garfias 1976) の基礎になるものです。

大学院時代に日本に滞在され、その時の研究方法が、後の氏の民族音楽学研究を特徴づけていると、私は考えています。それは、次の三点に要約できます。第一は、音楽をその社会的脈絡から切り離さずに考察すること。第二は、音楽を実践する演奏家に対する暖かいまなざしと敬意を保つこと。第三は、そのために必要な演奏能力と言語能力を身につけること。この三点のどれをとっても、行うことが難しいことです。ガルフィアス教授はそれに成功しました。

例えば、日本の雅楽を固定したものとして捉えましたが、その背景には、雅楽演奏家への氏の敬意があります。カリフォルニア大学ロサンゼルス校が、早い時期から雅楽の実習をカリキュラムに加え、宮内庁学部の故・東儀季信氏（小泉賞の第二回受賞者）を招いたのも、ガルフィアス教授のお蔭です。また、ガルフィアス教授はシアトルのワシントン大学で民族音楽学の研究を推進し、そのために、雅楽だけでなく、日本の地歌・箏曲のコースも開かれました。

これに関連して指摘したいのは、ガルフィアス教授が類を見ない言語能力をもっておられることです。まず、日本で丁寧な日本語を見事に習得され、音楽家たちから信頼を得て、研究を進められました。やがて、ガルフィアス教授は研究の領域を、雅楽だけでなく、日本では沖縄の音楽、東アジアでは韓国音楽、そして、東南アジアでビルマの音楽、さらにヨーロッパでは、ルーマニアやポルトガル、アフリカではモザンビークと拡げて行かれましたが、それに伴って、その土地の言葉を習得され、その土地の音楽家たちの仕事を評価され、その研究成果を、分かりやすい論文として発表され、さらに、録音や録画として公表されました。

氏の音楽学一般における功績は、大きく二つあります。第一は、ご自分の研究を通して、様々な地域の音楽を、その社会的脈絡と音楽構造をバランスよく記述する方法を示し、その成果を現場に戻したことにあります。

氏の功績の第二は、ワシントン大学、そして、現在も勤務されているカリフォルニア大学アーヴァイン校で、音楽学を活性化する組織を作り、それを運営して来られたことです。日本には、国立民族学博物館に招かれ、日本の音楽学者に刺激を与えて来られました。この博物館から出版された『音楽：文化的脈絡』(Garfias 2004) も重要な著作です。また、ガルフィアス教授の 80 歳を記念して、ワシントン大学での元・同僚で、今はカリフォルニア大学ロサンゼルス校にいるティモシー・ライス教授が中心になって、『音楽と音楽家に遭遇する』という記念論文集 (Rice 2011) が出版されたのも、私たちにとって大きな喜びです。  
(聖徳大学教授・お茶の水女子大学名誉教授)

## References

Garfias, Robert

1976 *Music of a thousand autumns, the togaku style of Japanese court music: an analysis of theory and practice*. Berkeley, California: University of California Press.

2004 *Music: the cultural context*. (Senri ethnological reports 47). Suita: National Museum of Ethnology.

Rice, Timothy (ed.)

2011 *Encountering music and musicians: essays in honor of Robert Garfias*. Surrey, UK: Ashgate.